



妙たえ の光ひかり

通刊39号 復刊16号

1995年12月25日(季刊)

角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜

〒953 TEL0256-77-2025

鼬 (イタチ)

境内の池に放たれている錦鯉が、いつの間にか減っている。近頃増えたイタチの仕業だろうとの話になった。確かに車で走行中、道を横切る姿をよく見かけるし、境内を走る姿も目撃されている。

凶鑑によれば、人家付近に棲む小さな食肉獣で体は細長く、鶏舎に侵入して、一夜のうちに十数羽の鶏を食い殺して血を吸うことがあり気が荒い、とある。狐のせいかと思っていたアヒルの失踪も、このイタチか。魚も水に潜って捕るので、錦鯉の産地では池の周囲に金網をめぐらしているとのこと。ここでもそうしたらいいという声や、昔竹筒で作ったワナで捕えてえり巻用に売ったことがあるから、それにしようという声まで出た。いやいや無駄なことは止めた方がいい、昔からイタチごっこと言うじゃないか、とのある年寄りの意見でチョン。

ちなみにイタチごっことは、両者がおろかなことをくり返してらちのあかないことをいう、と辞典にあった。自然が豊かで動物が多いのはありがたいが、共存していくことのむつかしさを実感している。

写真は「新潟県鳥獣凶鑑」より

新藤兼人監督とのご縁

小川英爾

十月のある日、『老・病・死を考える会』という集まりに参加、映画監督で高名な新藤兼人さんのお話をま近にお聞きする機会を得た。参加者は二十数名、小さな部屋で新藤監督を囲むようにして、固苦しくない雰囲気だった。八十三歳というお歳を全く感じさせない、失礼ながら朴訥で優しいおじさんという印象。ご自身の手による脚本、監督で、老いの問題を描いた『午後の遺言状』という作品が今年大ヒット、数々の賞もお取りになった。この作品に込められた思いをお聞きしようというのがこの日のテーマ。

この映画には人生の黄昏を迎えた三人の女性が登場する。老女優（杉村春子）と、その別荘の管理人を続けてきた土地の農婦（乙羽信子）、それに老女優の劇団仲間だったが恋愛結婚を機に女優を引退、専業主婦として夫と二人幸せに暮らしてきて痴呆症になってしまった女性（朝霧鏡子）。この三人を通して、老いをいかに生きるか、死をどう迎えるか、生きがいと仕事、老人性痴呆症、行政の対応等の問題が描かれている。

内容に次いで、この作品が話題となったもう一つの理由がある。新藤監督と出演の乙羽信子さんは、実生活で夫婦として四十四年間連れ添ってこられた。この乙羽さんが一昨年夏に肝臓を手術、その結果末期ガンで余命一年か一年半と宣告された。しかし新藤監督は乙羽さんにガンを告知せず、映画の撮影を昨年五月から十月にかけて挙行、撮影完了直後の試写を見て、十二月二十二日乙羽さんは七十歳で人生の幕を閉じた。撮影の間乙羽さんは高熱に苦しみながらも、痛み、辛さを訴えず平然と演技、共演の杉村春子もスタッフも誰ひとり病気に気づかなかったという。告別式で、新藤監督は「（乙羽さんは）映画が完成して演技者として大満足で天国へ行っただけだと思います」と挨拶された、とプログラムにある。

集まりでは始めに新藤監督が話された。「老いとは特別な領域に入ることではなく、これまでの人生の流れのまま、若さの延長の中の老いという感じで生きたいと思っています。映画では生命の芽ぶき、若さ、生きる力、大らかさを出したかったし、生や老いに希望の持てる明るい作品になったと思っています。乙羽さんにガン告知をしなかつ

たのは、人生最後の時を女優として生きぬいて欲しいと思ったからです。映画というのは集団で創るもので、告知されれば本人も弱くなってしまおうし、ひとりで病氣と闘う姿は他の人とうしても違ってしまおう。その上周囲の人も氣を使うことで全体の調和が崩れてしまわうんです。」等々、人は生きている限り生きぬくもの、という人生哲学を語られた。

続いて参加者からの映画の感想や質問となる。私の「乙羽さんが演じられた農婦に人間の生の強さ、たくましさを感じ感動しました。宗教者として見たとき、言葉による教えや理屈よりも、こうしたひとりひとりが生きてきた重さの中に宗教性を感じますね」との感想に、身を乗りだすようにしてこう応えて下さった。「私自身は特定の信仰とか宗教は持っていません。生まれが広島浄土真宗の盛んなところで、両親ともに信仰熱心でしたからそうした血は流れているかも知れませんが。ただ乙羽さんが死んでしまっただけで今はいないという現実の中で、乙羽さんのイメージはしっかりと残っています。ガン告知しなかったので死の話は一切しませんでした。幸い葉がよく効いて痛みがなかったのも、最後までこれまでの思い出をたくさん語り合いました。そのことで死に対する思いより、つき合ってきたつぎ合いの中身の方が先に立ち、生きてきた人間のかもし出す雰囲気が出て、死んでも悲しくはありませんでした。むしろ乙羽さんから生きる勇氣、元氣をもらった感じがします。私はこれが宗教ではないかと近頃考えているんです。死はひとり死んで死んで死んで、全くひとりではなく夫婦だったり家族がいたり、死は当事者同志の問題なんです。」

私達は言葉や理屈の宗教の前に、生き、老い、病み、死という避けられない現実の中に生きている。これを日常的には真剣に考えることなく過ごし、信仰を考えるとときは先祖さまかご利益中心になりがちである。お釈迦さまが王子の地位を捨てて出家、修行に入られたのはこの四つの苦を目の当りにしたからで、仏教の教えの原点もここにある。新藤監督の人間を見つめる姿勢に、改めて基本を教えられた思いがした。

この映画を見て角田浜の隣、五ヶ浜でもロケが行なわれたことを初めて知った。また新藤、乙羽夫妻には子供がない。映画界にはこうした人や独身者も多く、共同で入る墓を新藤監督が中心になって作られ、乙羽さんもそこに埋葬されたという。それを設計したのが今年二月私が北欧をご一緒した建築家で、その話を聞いた直後に新藤監督とお会いした。偶然とは言え、ご縁を感じた。そう思っていたところに新藤監督の事務所から、「監督がご住職のお話に関心を持ったので、事務所の人間が一度お邪魔したい」という電話が入った。

過疎化の中で

五ヶ浜 講 中

妙光寺には地区毎に檀家による講中がある。毎月集ってお経を読んだ後お喋りを楽しむ講中もあれば、地区内に不幸があったときだけの集まりになっている講中もある。人数も二十数名から、数軒ながら夫婦で集まるところまで。最も小人数なのがこの五ヶ浜講中。

五ヶ浜は日本海に面して、その昔漁業、廻船業、観光で栄え、一時は戸数三百〜三百五十を数えた。村には造り酒屋、油屋、醤油屋、銭湯、馬車屋まであったとか。それが今やすっかりさびれて戸数六十戸足らずにまで減少し、その大半が高齢者世帯である。裏手に山が迫り、田んぼもなければ畑もわずかという地形の上に、海岸が波で浸食されたのと、産業が大きく変化したことで過疎化してしまった。妙光寺の檀家も四十戸余りあったのが現在は九戸となった。

現在の五ヶ浜講中は七人。二十年前

に講中を復活してしばらくは、倍の十四人が毎月十二日夜に、茅ぶきの観音堂に集まっていた。十月は当番制で料理して会食、女性ばかりで歌や踊りも出て賑やかだった。それが亡くなった、町の子供の元に引きとられていたりして今の人数になった。

今は春と暮れだけ、新しくなった観音堂に集まり、十月の会食は続けてきた。十月は日蓮聖人のご命日の月。この日は朝から当番の家に皆が材料を持ち寄って料理をし、お経の後住職を囲んでテーブルにつく。前の海で採れた新鮮な刺身に鮭の焼物。裏の山で採れたキノコと庭先の畑で作った野菜の煮物。自家製味噌のキノコ汁、あえ物、ひたし。漬物は各自持ち寄り。

窓の外から聞こえてくるのは波の音だけ。時が止まったかのような静寂さの中、昔話から日常の困り事まで話題はつきない。七人のうち三人は夫に先

立たれてひとり暮らし。「やっぱり大勢で食べるご飯はおいしいネ」と口を ついて出る。

高齢者は夜出歩けないので、他の二回も昼間の集まりにしている。しかし六十才台はパートに出たり、海が風げば漁師の夫の手伝いに浜に出なければならず、少ない人数がなお寂しくなる。

毎年四月二十八日は、村の遠藤本家から日蓮聖人の遺された御印を、妙光寺にお運びしてご開帳する「御判様」の日。数百

年続いたこの行事も昔日の賑わいはないが、講中としてこのお出発のお見送りだけは続けたいと語り合っている。



題目堂増築、お水屋修復、池庭工事、完成



盗難に遭った題目堂の八幡大菩薩像再建と、日蓮聖人像修復が皆様のご協力で今春完成しました。これを機に題目堂本屋の増築と、隣接のお水屋解体修復の奉納を、角田浜の斉藤政六さんからお申し出があり、役員会としてありがたうお受けしました。

題目堂は日蓮聖人が佐渡遠流の際角田浜に漂着、七面天女最初ご教化の記念に、八幡大菩薩とお題目を書き分けられたとされ、妙光寺の創立に由来する由緒ある霊蹟です。江戸時代には長岡の殿様が熱心に参詣されました。昭和に入って戦後間もない頃までは、お堂も大きく僧侶も常住し、多くの信者がお籠りして修行していました。近年

は秋田県に熱心な信者が多く、十文字町の妙倉寺というお寺はこのご縁で開創されたそうです。

また昔からここに沸くお水が薬効ありと伝えられ、病気に悩む人が汲んでいたり、近くの造り酒屋が酒造りに汲みに来たりしていました。このお水屋が老朽化していたみがひどく、せっかくの沸き水も濁りがちでした。こうした状態に心を痛めていた斉藤さんの発願で、このたびの工事となったわけです。すっかり解体修理されて見違える程にりっぱに完成、題目堂本屋も参詣しやすいように四坪分新たに増築していただきました。

斉藤政六さんとご協力の家族の方々、そして応援下さった東京の斉藤高市さん、石田博さんのお二方に、心からお礼申し上げます。

池庭工事完成

何度かお伝えしてきた参道脇の池庭工事が、この秋見事に完成しました。

五月中旬から丸一ヵ月要して大石を使った水の流れる滝を作り、十月にあずま屋完成、十一月にサツキ、ツツジ類五百株、雑木百本余りの植栽が完了しました。来春の芽吹きが楽しみです。

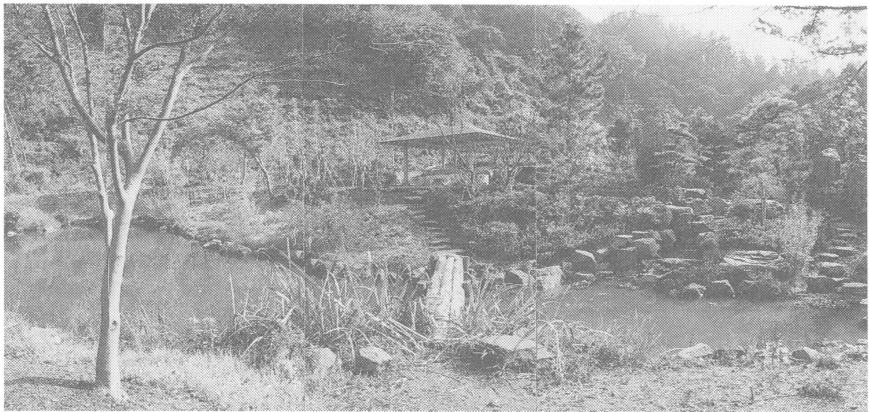
この計画の発端は、境内の水はけが悪いところへ、以前は池だったこの場所が隣地の所有者の都合で埋められたことで、余計水はけが悪くなったことによります。昭和六十年頃のことです。対策としてここに防火用水を兼ねた遊水池を掘り直し、将来的には庭として整備する。その経費は当時巻割前であった説教所が無住になったので土地を売却、その代金の大半は客殿建替工事資金に充当したが、その一部を残して充てて説教所の記念とする、ということでした。

経費を浮かせるために、池周りの石は全て福田採石(株)の寄贈、その運搬、石組、あずま屋の材料に本堂裏の杉の切り出し作業、参道側の樹木と植栽、

全て檀家の有志の方々の奉仕でした。それでも土工事に費用がかかり、あずま屋の分を除いて資金が底をついてしまいました。

その時、暗渠排水に必要な一部隣接土地の購入に遠藤祐弘さん(当時東京)が、今回の滝組、植栽一切を遠藤茂五郎さん(新潟市)が、現場作業を遠藤均さん(新潟市)が協力を申し出て下さったのです。また完成したあずま屋にテーブルがないことを知った本田保司さん(巻町)が、樹齢百年余りの櫨の原木を提供下さり、少し残ったあずま屋の予算でテーブルとベンチまで作ることができました。本田さんは八月に奥さんを亡くされ、新しく檀家になられた方です。

実にたくさんの方々のご協力です。上った池庭です。水はけも本当に良くなりました。消防用水としても大きな意味があります。これから皆さんで散策したり、気持ちよく利用していき





いと思います。ありがとうございます。

佐渡霊蹟参拝の旅

十一月六・七日、佐渡の日蓮聖人霊蹟を巡拝しました。檀家、安穩会員、そのお友達で定員ちようどの四十五人。中でも松山地区はご夫婦四組を含めて全檀家が参加されました。

一日目に根本寺、世尊寺、妙宣寺を参拝。ゴールドパークで砂金取り体験。泊まりの相川のホテルでは本場の佐渡おけさ、相川音頭を堪能、踊りも飛び出すなど楽しい一夜でした。二日目に実相寺、妙照寺を参拝、尖閣湾観光、紅葉のスカイラインを経由して、三時半のフェリーで両津港を後にしました。

前日まで一週間、船も欠航する大シケだったのが、この二日間はバスに冷房を入れる程の上天気。お待ち下さる各寺のご住職に「好運ですね」と迎え

られました。二日目、快適な船旅を終えて自宅に戻る、その夜から二日間また大荒れの天候で船も欠航になりました。後日皆さん「日蓮聖人のお助けをいただきましたね」と。

お会式法要

日蓮聖人ご命日の法要であるお会式を十一月十日に行ないました。今年は七百十四回忌です。六十五人の方がお参り下さり、皆さんで本堂内陣でお経を上げました。おとこの後、富山からお招きした青木新門さんのご講演。青木さんは苦勞して早大を出た後、ひよんなことから入社した葬儀社務めを続けながら詩、小説を書いて来られました。先年、その体験を元にした『納棺夫日記』を朝日新聞社から出版、話題になりました。この日は、ご自身の体験から宮沢賢治、法華経の世界まで、感動的に語って下さいました。

妙光寺史話

角田山御歴代控より(四)

六 長岡藩との関係

角田山歴代控の数ヶ所に長岡藩とのかかわりが記されている。

一 冒頭に当山寺領が載っている。

一、境内

一、薪山三ヶ所

一、田壱反七畝歩

これは慶安三寅年(一六五〇)長岡より御検地の節、年貢免除の土地としていただいたもの。(長岡初代藩主忠成公の時代)

一、田三石六斗 此の反別は年貢地。

一、畑二石五斗五升 此の反別六反

八畝

右は二十五世日逞上人代(一六七〇年代)長岡よりいただいた開発した新田である。(長岡三代藩主忠辰公の時代)

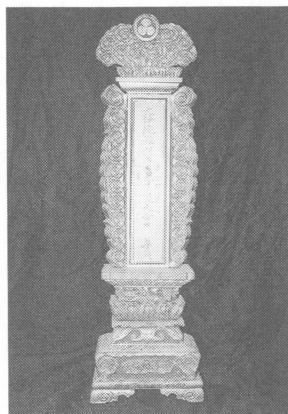
○長岡の殿様が厚く信仰され、殿様から庇護される程の格式の高い寺院であることを強調したい意図のもとに記されたものであろう。

○三代藩主忠辰公は、法華経への信仰が厚かったと言われているが、妙光寺位牌堂の中央に大きく立派な御位牌が安置されている。御位牌には

享保七壬寅年

大浄院殿朗然成喜日観大居士 尊儀

八月上浣六日



當山御厚信之大檀那
長岡大守前駿河守殿



と記されている。

享保七年（一七二二）に没された藩主は三代忠辰公である。

○長岡市役所発行「ふるさと長岡のあゆみ」によると、忠辰公は十歳で家督を継ぎ、五十八歳で没するまで藩主であり、長岡藩明主の一人に数えられる優れた藩主だったといわれている。

即ち

・新田開発、植林の奨励

・商工業の奨励

・敬神家……荒廃していた弥彦神社の再建。この社殿は明治四十五年に焼失。

・学問を好み、五代將軍綱吉の面前で数回論語を講述したという。

・悠久山にある蒼柴神社に蒼柴靈

神として祀られている。

○忠辰公は何回か妙光寺に参詣され

たのであろう。

二 三十二世日進（日進と改名）上人の時代

1. 寛延三年（一七五〇）九月

「長岡の殿様（七代藩主忠利公……十

七歳）御巡村の砌、当寺へ御立寄りの計画のところ、計画の変更により、

御立寄りにならなかった。そこで住

職は、家老稲垣太郎左衛門殿の

ろへ参り、先例とちがったのはどう

いうわけか、と尋ねられた」とある。

これを裏づける文書が残っている。

寛延三年（一七五〇）九月二十七日、長岡城主（七代藩主忠利公）御参詣の砌、諸事覚書」という見出しで内容

は、

長岡御城主が御回領の際、先例の通り妙光寺へ御参詣されるとのこと支度をしていた。ところが御参詣になら

ず巻よりすぐ御帰城されるといふことになり、二十八日住職が巻へ出向き、御城主に御目見えを許された。

その時、殿様から御菓子と金二〇〇疋いただいた。当方から貝二〇〇個献上、家老の稲垣太郎左衛門殿へ貝一〇〇個差し上げた。

殿様が出立される時、家老から住職に「過去の長岡藩と妙光寺との関係、由緒を詳しく文書で報告せよ」と言われた。

寛延三年九月二十八日

「日進書」とある。

（次号は殿様へ提出した角田山由緒）

（石田誠太郎）

ムササビのねぐらを追って

新潟西高校教諭 藤田久

妙光寺が、ムササビの生息地になる一つの理由には境内に、ねぐらがあるからです。境内にある何本かのマツやケヤキに直径十センチほどの丸い穴が開いているのをご存じでしょうか。夕方、暗闇になる頃、ムササビは穴からそつと顔をのぞかせ周囲をうかがっています。しばらくして樹洞から体を引き出して素早く幹をかけあがり、木の頂きからすつと滑空し、闇夜に吸い込まれます。

「ねぐらのでき方」

この樹洞はどのようにしてねぐらになったのでしょうか。もともと樹

木は古くなると中心部が腐って「空(うろ)」がでやすくなります。この入口はムササビが削って開けると考えがちですが、実はそうでなく、キツツキが開けるのです。樹洞には虫がつくらしく、それを求めてコンコンとやるのです。また、恋の季節には、雄が「愛の巣」を雌にプレゼントする習慣(習性)があり、気に入ってもらおうと、やたら穴をあけるのです。そんな訳で本堂の羽目板にはいくつもの穴が見つかり、アカゲラやコゲラなどの生息も確認されています。あとはムササビが入口を手直しをして削り、ねぐらとするわけ

です。

もしキツツキがいなくとも、風雪で幹や枝が折れることがあり、自然にできる小さなすき間をムササビは見逃さないので。

「境内のねぐら」

境内のねぐらの樹木には、それぞれ名前をつけ、門松、中松、二本松などと呼んでいます。ところが、これらをムササビは通年使用するとは限らないのです。時には別な巣穴に移って不在になったり、二個体が使ったりするのです。これには何かムササビの社会に特別な事情があるらしく目下、これを調査中です。

さらに今年になって新たな一カ所が確認されました。それは「山門」の屋根裏でした。庇の羽目板は、もちろん穴だらけ。ここは、昨秋にアカゲラが一時、住人になったことがあり、いつ使われてもおかしくなか

ったのですが、七月からムササビが顔を覗かせるようになりました（写真）。このように屋根裏のような空間があると、いろんな鳥や獣にねぐらを提供することにもなります。

「ねぐらのムササビ」

ねぐらは、樹洞ばかりではありません。今はほとんど見られなくなつた「はざ木」に稲を掛けたときにできる三角形のすき間が使われた珍しい例があります。

樹木の他は民家や納屋の屋根裏がよく使われます。それは山間地に今も残る茅ぶきの家屋に多く、囲炉裏を使つていた関係で煙穴からよく侵入するので。ですから夕食で囲らんな中の家族をムササビが天井の梁から見下ろして外出するという、のどかな光景があつたのです。もちろん家族も知っていました。

しかし騒ぐムササビもいます。屋



根裏から追い出してほしいという依頼を受け、煤まみれになって梁の上を綱渡りのようにおそるおそる這つて歩いたことがあります。捕獲はまず不可能であり、煙穴をふさいだとしても、すき間などはいくらでもあるので寢床の巢材を撤去する措置を

とりました。直径1mほどのスギの樹皮が山のようになつて中央が凹んでいる寢床でした。ムササビには大変気の毒でしたが、ねぐらを覗く（調べた）ことは、めつたにないチャンスなのでとても感激したものです。

では、キツツキもいない、樹洞や民家もないような林ではどうするのでしょうか。やはり野鳥のように枝を折つて巢を組まなければなりません。ですからムササビにはどちらかといえば人の暮らす世界にいる方が、すみ良いのでしょうか。自然が残るここ妙光寺は、人とムササビが暮らす共生の地なのです。

写真 山門の穴から出巢したムササビ

（撮影・鎌田義明）

アンケートありがとうございます

今年の第六回フェスティバル安穩が夏の八月十九、二十日に行なわれ、宿泊が八十名、当日が百名余りの参加をいただきました。今回は講演、法要の後、温泉入浴、そして第一号

の地ビール『エチゴビール』を貸切りにして交流パーティー、宿泊は妙光寺と民宿に別れてという形でした。

大変なごやかで、たくさんの方の交流の輪ができていました。一方、予想以上の多数の一般参加が全国からあり、受入れ体制に不備が生じてご迷惑をおかけした点もありました。なにしろ講演から食事、宿泊までを手作りをしたいというのが方針ですが、参加者の年齢層の幅が広く、前日まで変動があるなどスタッフは冷や汗をかいて準備しています。

すっかり定着して毎年楽しみにしておいでの方も多いため、来年も八

月二十四、五日を予定しています。「もう少し身近なテーマで交流ができたら」という声もありますので、反省会で話し、検討中です。

安穩廟二基目も残り十区画程になってしまいました。予定地はもう二基分ありますが、こんなに早くては住職の対応がついていけず、三基目建設はよく相談の上で決定するという方針です。これに関してアンケートをお願いしました。とても回収率が高く感謝しています。ありがとうございます。

さて、今年は住職が東京、神奈川県方面の檀家のお葬式に呼ばれる回数の多い年でした。中でも神奈川県Tさん(男性)、朝急に具合が悪くなって救急車で病院に運ばれる途中亡くなっていました。こうした場合死亡原因をはっきりするために警

察の手で司法解剖されます。

うろたえる奥さんのところへ、病院と契約していると思われる葬式社が現われ、どんな葬儀の話を進めて見積書を渡し、契約となっていました。後で集ってきた親族や冷静になった奥さんの意向も「土地のしきたりです」とやんわりとズバリ拒絶します。あまりのひどさに早目に相談された住職が、通夜の後葬儀社に言う、「施主の意向ですから」と嘘を言います。きつく言って一部日程を変えさせました。以後葬儀が終了するまで住職に近づいてき

ませんでした。以前にもこうしたことがありました。どうぞ葬儀によらずご不明の点ご相談下さい。



「鎌田くん」



月日の経つのは早いもので、鎌田君が住職の弟子となり、妙光寺で暮らすようになって、年が明ければ丸二年になる。

鎌田君との出会いは、私が妙光寺へ来てまだ十ヶ月後の夏だった。彼は当時十四才。夏のある晩、私が用事を終え帰って来て、お茶に誘いに部屋へ行くと、緊張して疲れたのか、かわいらしい顔をして眠っていたのがとても印象に残っている。以来長い休みのたびに、妙光寺へやって来た。中学、高校と一番遊びたい時期に、親元から離れお寺での修行は、さぞ辛かっただろう。彼の家はお寺ではない。本当に志ざして、自ら望んで僧侶の道を選んだ。

今はお寺といえども血を分けた子供が後継として次期住職になる事が多いなかで、鎌田君のように志を立て、僧侶になる人も意外に多いと聞く。

生まれた家がお寺で、父親が師匠の修業僧とは違った面で、その苦勞はなみたいていのものでは無いように思える。彼のようなお坊さん、そしてお坊さんになりたいと思っている人々に、惜しみない応援を送りたい。

偶然にも妙光寺の行事にお手つだい下さっている僧侶の方々の中には、お寺以外の出身の方が多い。こうした立派な先輩が身近にたくさんいらっしゃることも、鎌田君にとっては良い勉強になるだろう。

初めて会った時は小さな弟のようで、あどけなかつた鎌田君も、もう二十五才になった。優しくて力持ちを絵に描いたような人柄だ。お寺の仕事はめちゃくちゃにたくさんあるが、彼のその一つ一つを着実にこなしてゆく。時には住職に叱られたり、休日も無く修行を続ける姿が、かわいそうになることもあるけれど、自分で選んだ道なのだから、くじけずに頑張ってほしい。

妙光寺が彼の師匠寺だということ、彼に一生ついてまわる。彼が良い修行が出来るように、檀家の方々も暖かく見守ったり、厳しいアドバイスをいただけたらなあ、と思う。

娘たちや、その友人の少女少女たちから「アニキ」と親しみをこめて慕われているが、はたから見てもステキな青年になった。

小川なぎさ

行事案内

十二月三十一日 除夜の鐘

大晦日夜十時半より本堂で除夜法要。続いて十一時四十分頃から除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に一回ずつ撞いてもらいます。その方には記念品と、抽選で楽しい縁起物の景品が当たります。暖かいこんにゃくも出て、とても賑やかです。毎年出足が早くなつて、十一時半には並んでいないと百八以内には入れません。

同時に本堂前でお焚き上げをします。同時にお札、注連等お持ち下さいます。

この時間帯に車が集中して入口付近で混雑します。臨時に照明設備も用意しますが、運転者、歩行者ともにご注意下さい。

元旦 年始受け

元旦の朝より午後にかけて年始受けをしています。一年の始まりを妙光寺本堂から、です。

八年に法事の当たっているお宅は祖師堂に張り出してありますので確認して下さい。

一年の家族の安全、健康、幸運を祈る『星祭り』祈願をお申し込みの方は、元日にお札を渡します。七年より一軒二円をお願ひしています。

住職不在

一月七日より十八日の間、住職は休暇をいただき留守になります。この間鎌田がおりますし、住職にも連絡はとれます。ご理解、ご協力下さい。

あ・と・き が・

今年も九月号をサボってしまいました。夏の疲れが出てしまうのでしょうか。おわびします。

今年には阪神大震災でのボランティア活動、オウム事件、宗教法人法、関連して創価学会池田名誉会長の国会喚問など、宗教が問われるニュースが多い一年でした。これに対して宗教者の側からの発言がさっぱり聞こえてこない、社会からの批判も大きくなっています。

まったくその通りで発言したく思うのですが、それに伴って行動が求められたときに仲々できない。毎日の用に追われてしまい動けない自身に焦りと苛立ちをおぼえてしまう。若いせいなのかふけてきたのか。来年には四十四才を迎えます。

どうぞ良いお年をお迎え下さい。

(小川)